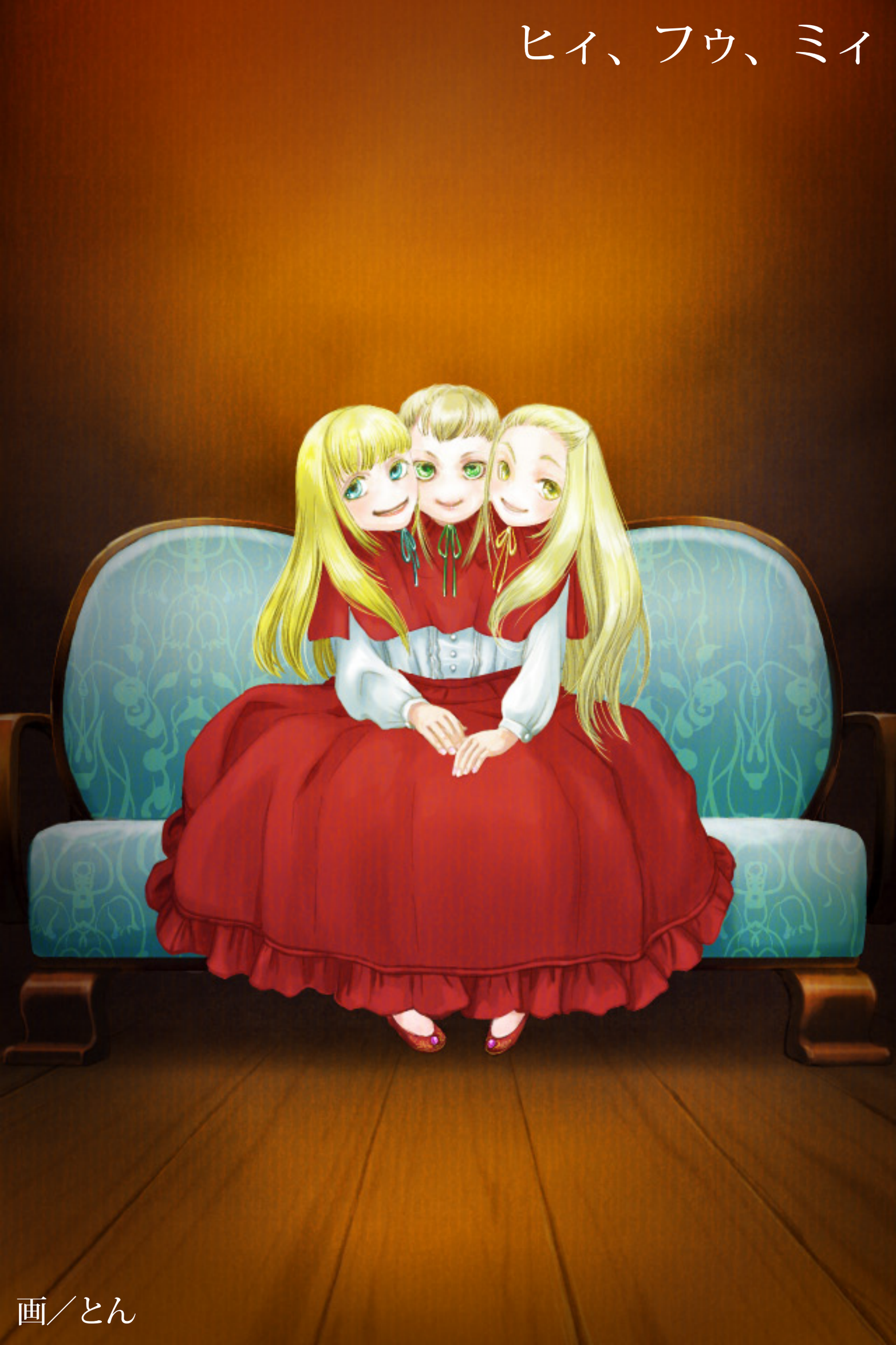
嘘つき遊園団

ガッ!文庫

黒実操

ヒィ、フゥ、ミィ



画／とん

竹の子文庫

嘘つき曲馬團

（うそつききょくばだん）

墨実操 著

竹の子書房文庫

竹の子文庫

嘘つき曲馬団

※本書ニ登場セシムル人物名、団体名、事件、描カレ在ル内容等ハ作者ノ脳髄ヲ搾リテ創出セシメ足ル架空ノ物也。作中ニ於イテ昨今耳慣レヌ言葉、表記、表現等登場セシムル事在リシモ、是差別侮蔑ヲ意図スル物ニ非ズ。尚、本書原稿ノ保存状態著シク惡ク読解不適ノ頁存在セシムルヲ、本書冒頭ニ於イテ赦免ス。

表装画・挿画　サデスパア堀野

挿画　とん
挿画　ぴぺっと！
挿画　酒井康彰
挿画　ひょーじ
挿画　有川憂
挿画　よしはる犬

第壹(いち)幕

スマヰル(すまいる)お千代は何故死んだ

スマキルお千代
画／酒井康彰

ツラヌキお巻の金切り聲が、曉に響く。
眞つ先に驅けつけた馬夫人が見たものは、嗚呼無殘、スマヰルお千代の哀れな骸。
「お千代、お千代なのかい。何故返事をしないんだい」
四つん這ひで手探るお巻を、馬夫人が抱き留めた。
「お巻さん、落ち着いて聞いとくれ。お千代は死んでゐる。口から、ああ酷い血だ。……何か物音は聞こへなかつたのかい」
馬夫人の問ひに、お巻は頭を振るのみ。
お巻は目が見えない。四六時中、黒い目隱しを着けた

儘。だが此處『ジェントル曲馬團』のナイフ投げのスタアなのだ。

馬夫人は、夫婦で曲馬藝を披露する。夫は青毛馬のロッポンだ。

此の騒ぎに三ツ首のヒィ、フゥ、ミィ。キャット次郎と三郎の幼い兄弟もやつて來た。三ツ首は道化で、キャット兄弟は輕業師。

死んだお千代はナイフ投げの的だつた。

「何の騒ぎだね」

最後に、團長（だんちょう）のジェントル曲馬が現れた。

「お千代が死んでるー」

「死んでるー」

「でるー」

三ツ首がヒィ、フゥ、ミィの順番で答へる。首は違へど、同じ形で歪む口。

「何ッ、お千代が死んだと」

金の巻き毛を揺（ゆ）らして、ジェントル曲馬が輪を覗く。分厚いカイゼル髭（ひげ）を撫でつけ乍（なが）ら、物言はぬお千代を眺め回（まわ）してから言つた。

「可哀想に。然(しか)し良い笑顔ではないか。皆もさう思ふだらう」

「笑顔。お千代が笑つて？」

お巻が叫んだ。

キンとした空氣。

「素晴らしい笑顔だ。スマヰルお千代の名に恥ぢぬ」

ジェントル曲馬は言ひ切つた。

「笑顔だよ」

「だよ」

「よ」

三ツ首が順繰りに聲(こえ)を張る。

「……笑顔」

馬夫人も呟(つぶや)いた。

キャット兄弟は目配せして、頷いた。

お巻は唇を動かしたが、結局聲には出さぬまま。馬夫人は、其(そ)の顔を盗み見てゐる。キャット兄弟は棒立ちで、三ツ首は無言でニヤニヤ。

輪の中心には小さなお千代。

團長はお千代の身體(からだ)を抱き上げて、何處(どこ)かへと運んで行つた。

第貳(に)幕

プリンス滋比古(しげひこ)、曲馬と出會(であ)ふ

プリンス滋比古

画／サデスパア堀野

「――と云ふお話でね」

ジェントル曲馬は兩手を開いた。花のやうな白手袋。

對峙するは少年。精々十三、四歳と云つたところか、滑らかな頬だが、何處か人を食つたやうな顔をしてゐる。

乗り出してくる團長を上目で見遣り、甘いコクテルを舐めてゐる。

「隨分と氣取つて話したもんだ。何處かへと運んで行つた、なんてさ」

鼻で笑ふ。

「うつふつふ、大人に向かつて何て口の利き方でせう。

流石此の街一番の名士、甍部海運のご嫡男であらせられる」

ジェントル曲馬のマナコが細くなつた。

「分かつてるなら、お前こそ口の利き方には氣を附けろ」

劍呑な空氣を鼻息で吹き飛ばし、少年は顎を上げる。

「お前達のやうな胡散臭ひ連中なんて、ボクの一聲で此の街から追ひ出せるんだ」

「其れはもう。だからこそ、坊ちやまに此のお話を持つてきたんぢやないですか。コクテルのお替りは如何？」

「紙巻き煙草もだ」
曲馬が、女給に其の二つを命じた。歳若い女給は白けた顔を隠さうともせずに、曲馬が指すより早く、注文を少年の前に置く。背後からの給仕に、振り返る事をしなかつた少年は、其の表情を知らないままだ。
女給が去つた後、曲馬は少年の耳に唇を寄せた。
「私はね、坊ちやまにお千代が何故死んだのか、其の謎を解いて戴きたいのですよ」
「ふん」
「私らみたいな渡り鳥には、警察は少々欝陶(うっとう)しいもので

して。一處(ひととこ)に長く留(と)められても困りますのでねえ。然し、お千代の不幸を其のままにはしておけません。困ってゐたところに、坊ちやまの評判を聞いたのですよ」

團長の申し出は豫想濟(よそうず)みだつたのだらう。自惚(うぬぼ)れの強い少年は、迂闊(うかつ)にもしたり顔を曝す。

曲馬が更に頬を寄せる。金の巻き毛が、少年の櫻色の耳で潰れた。

「坊ちやまの卓越した腦髄(のうずい)と大人顔負けの度胸で、どうかお千代が死んだ譯(わけ)を解いてやつて呉(く)れませんかねえ」

吐息が掛かる。ゾクリ。少年は反射的に耳朶(みみたぶ)を抑(おさ)へ、

身を引くと、
「そ、そんなこと言つてるが、知つてるぞ！」
狼狽（ろうばい）を誤魔化すべく、早口に喋（しゃべ）る。
「ジェントル曲馬、お前のことは皆『ゼニトル曲馬』つて呼んでるぞ。何でも金にするつて評判だ。欲張り！ケチンボ！　此のボクを使つて犯人を捜して、其（う）れをお千代の家族に賣りつけるんだらう。え、さうだらう！」
「……お千代の【家族】は私らさあ」
ジェントル曲馬のマナコが、また細くなる。目には見えない動物電氣が迸（ほとばし）る。

少年は、口が過ぎた事を思ひ知る。

睨(にら)み合ひ、少年が折れてゐる事を眼光(まなざし)で確認した曲馬は、あつさりと雰圍氣(ふんいき)を緩めた。

「坊ちやまが引き受けてくださるなら、私らは御禮(おれい)をしますがね」

内心、少年は安堵したが、

「約束するか」

と虚勢を張つた。

「血判を御所望ならば其れも」

「要るか、そんなもの。ぢやあ、引き受けよう。ボクの

ことは滋比古様と呼べ。子供扱ひはするな」

紙巻き煙草を灰皿に押し附け、滋比古は席を立つ。

「ぢやあ、團員共に話を聞くぞ」

「其れはもう。滋比古様の御見立てのままに。正直にお答へするやう言ひつけてありますので。さうだ。先程の、もう一度お話ししませうか？」

「あの程度の、一度聞けば十分だ」

逃げるやうに少年はカフエエを出る。

残されたジェントル曲馬が呟いた。

「ゼニトル曲馬ねえ。うっふっふ。御自身はプリンス滋

比古つて渾名(あだな)で嗤(わら)われてることは、御存知なんですかねえ」

樂(たの)しさうに、分厚いカイゼル髭を撫でつける。

「うっふっふ。怪しい、か。人の話を聞かない子供だ。私らは【家族】だと申しましたに」

第参幕（さん）

馬上豐（ばじょうゆた）かな馬夫人、亭主を尻に敷く

馬夫人とロッポン

画／サデスパア堀野

カフエエを飛び出した少年を、暮色が包む。

滋比古は、團員達が寢泊まりしてゐる木賃宿へと足を向けた。街外れに近い位置、本來なら滋比古など生涯立ち入ることはない一角。

一見複雜な道筋だが、川沿ひに進めばさうでもない。

掘建て小屋同然の、小さな家が重なるやうに竝んでゐる。

親子が割れた窓硝子を氣にもせず、蝋燭の下、夕餉を圍んでゐる。何が煮えてゐるか分からない濁つた鍋から裝ふ、茶碗一杯の其れだけを掻き込んでゐる。はしやぐ子供ら。大らかに笑ふ母。其れらを滿足さうに眺める、父。

滋比古は、ふと亡き母のことを思ひ出した。美しくはないが暖かだつた、母様。

母が死んだ日。さう、其の當日(とうじつ)。美しいが惡(わる)い女が、家に入り込んだ。父は、アレを母と呼べと滋比古に言つた。

「誰が、あんな踊り子上がり」

空唾(からつば)を吐く。ふた月後、義弟が生まれた。

赤子が生まれる理(ことわり)など、とつくに知つてゐた。母様(かあさま)が死の牀(とこ)に就いてゐたとき、其のとき父様は……。滋比古の理性も感情も、混沌に沈む。父も義母も避けて、家か

らも逃げて、そしてかうなつた。
いや、しつかりしろ。今はこんなことを考へてゐる場合ぢやない。滋比古は唇を噛む。
入り組んだ角を何度も曲がり、教へられた木賃宿に差し掛かると、カッと蹄（ひづめ）の音。
「プリンス様がもう來たのかい」
頭上から女の聲。
「誰だ」
振り仰ぐ滋比古。
「アタシはジェントル曲馬團の馬術藝者（ばじゅつげいしゃ）、馬夫人さ」

大女だつた。青毛の太つた馬に横坐(ずわ)り、胸下には前結びした帯(おび)のやうな、莫迦(ばか)げた大きさのリボン。足首まで覆ふ長いスカアトは、丸く膨らんでゐる。

「團長の曲馬に、頼まれたから來てやつた。お前、話を聞かせろ」

滋比古は人差し指を突きつける。馬夫人は其れを無視するやうに、

「此奴(こいつ)ァ、アタシの亭主のロッポンさ。六本脚だからロッポン」

言ひ乍ら、鞍の下に敷いてある地べたを這ふ飾り布を、

ちらと摘んだ。鐙(あぶみ)の眞下(ました)に、もう一對(いっつい)の蹄(ひずめ)が見えた。

「そんな子供騙しに乘るか。薄暗い中で布越しに。ハリボテだろ」

馬夫人は布を離し、膨れる。

「亭主に挨拶しとくれよ」

「やだね。馬になぞ」

「好(い)いのかい。そんな口、利いてさ」

「無駄口叩く暇があつたら、お千代の死骸がどうだつたか教へろ」

「死骸！　死骸だつて！」

馬夫人は益々膨れたが、

「まあ好い」

と顎を上げた。

「團長の命令だからね。教へるよ。お千代は仰向けに倒れてた。口から血が一杯溢れてて、泡も噴いてた」

「笑つてたつて訊いた」

「團長が言ふなら、さうだろ」

「お前に訊いてるんだ」

「お千代はね、半年前に【家族】になつた」

馬夫人の語氣が荒くなる。

「まだ小娘で何も出來(でき)ないから、お巻の的をやらせたんだ。目隠ししてるナイフ投げの、的なんかやらされて笑へると思ふかい？　あの子が笑つてるのなんて、團長が教へて呉(く)れるまで、只の一度もアタシは見たことはないよ」

落ち着かうとしたのか、馬夫人は青毛の首を愛しげに撫でる。

「まだ十二歳。長い御下(おさ)げが内緒の自慢だつたけど、お巻がやつちまつてね。ワザとぢやないんだよ。うつかりナイフが逸れて、右の御下げを切つちまつた。お千代が死んだのは、次の日さ」

言ふと、馬夫人はロッポンに輕(かる)く鞭を入れた。後頭部高く一つに結ばれた其の髪が飜(ひるがえ)り、夫の尻尾と同じ動きをする。

「アタシの話は此れだけさ。夫は生憎(あいにく)無口でね」

「待て、まだ話は」

「終はつたよ。アタシは早く歸(かえ)つて休むんだ。もう臨月(りんげつ)なんでね」

此れ見よがしに腹を摩(さす)り、艶然(えんぜん)と馬夫人は微笑む。

「……アンタも早く歸(かえ)つたらどうだい」

「おい、待てつてば」

手を伸べる滋比古。だが、其れには構はず、夫妻は悠々と去つていつた。

宝塚少女歌劇團

嘘つき曲馬団

第肆(し)幕

三ツ首竝(かしま)んで
姦しムスメ

ヒィ、フゥ、ミィ

画／とん

薄暗い電燈の下、滋比古は、掌に走る幾本もの盛り上がつた筋を指でなぞる。無意識の仕草だ。焼け火箸の痕。あの女が附けた。

「母様と呼びな」

拒むと掌を焼き、

「此の子は火遊びの惡い癖が」

と父親に泣きついた。父は、義母の目の前で滋比古を毆つた。

義母は情から母と呼ばせたがつたのではない。滋比古の胸の内に生きる母を、殺す意味での所業。言はれなく

とも傳(つた)はつてゐた。小さな掌に隙間がなくなり掛けた或(あ)る日、滋比古は屈した。『母様』と呼んだ。義母の赤い薄い唇が、勝利の形に吊り上がり、

「私を踊り子上がりと蔑(さげす)んでやがるが、お前を産んだあの女なんか」

と、何やら忌まはしいことを囁(ささや)いた。滋比古の中の『母様』と云ふ言葉が、其の瞬間から二重寫(うつ)しに變(か)はつた。『しげひこ』と形作る、厚めの丸い唇こそが『母様』だつた。其處(そこ)に義母の酷薄な赤い唇が割り込んで重なる。

以來『母様』と云ふ言葉を引き金に、否応なく二つの

唇が網膜に甦る。

滋比古は掌の筋に爪を立てた。痛みが幻を振り拂(はら)ふ。

「馬夫人は母様に成るのさ」

「成るのさ」

「のさ」

茶袱臺(ちゃぶだい)を挾(はさ)んで道化の三ツ首がニヤニヤ。年の頃は十六くらゐの女の首が三つ、幅廣(はばひろ)の肩に乘つてゐた。

向かつて右からヒィ、フゥ、ミィと名乘つた首は、同じ顔で同じ聲。フゥが若干(じゃっかん)前のめり。緞帖(どんちょう)のやうな赤

い布で全身をすつぽりと包んでゐて、首つ玉をキュッと巾着のやうに締めてゐる。手は左右の切れ目から一本づつ出てゐるが、どうにも動きがちぐはぐだ。

恐らく、と滋比古は睨む。三ツ兒（みつご）が布の中で身を寄せ合つてゐるのだ。右手はミィ、左手はヒィ。フゥは二人の間に身體を入れてゐるのだらう。

「ご苦勞（くろう）なこつた」

「なに？」

「なに？」

「なに？」

「何でもない。其れより馬夫人は本當(ほんとう)に姙婦(にんぷ)なのか」
「可愛い仔馬が」
「生まれる」
「よ」
「生まれるか、莫迦」
ゲラゲラゲラゲラ。
氣色(けしき)ばんだ滋比古を指差し、聲を上げて三ツ首がはしゃぐ。
「もう好い。お千代の話をしろ！」
滋比古は怒鳴つた。ペエスが亂(みだ)れる。

「御菓子をお食べよ」
「さあどう」
「ぞ」
「そんな不潔なものが食へるか」
其の言葉に、また三ツ首は嬌聲（きょうせい）を上げる。
「不潔ぢやないよー」
「猫イラズたつぷりー」
「ぷりー」
「死ぬだろ、其れ！」
茶袱臺に手を突いて、滋比古は膝立ちになつた。

「もう好いッ！　お千代がどんな様子で死んでたか、其れだけ話せ！」

天板を叩いた。

ゲラゲラゲラゲラ。

其れが面白かつたらしく、三ツ首は大喜び。

「戸棚の脇で、引つ繰り返つてたのー」

「蟲みたいつて言つたら、怒られたー」

「違ふよ違ふ、笑つてたー」

「言はれて見れば。ニッコリ笑つてたのー」

「口が耳まで裂けてたのー」

「違ふよ違ふ。笑つて死んだつてのは情けだよー」

ゲラゲラゲラゲラ。

てんでバラバラ。好き勝手。三つの唇は止まらない。

滋比古は怒鳴りつけたいのを耐へて、頭の中で整理する。明け方、仰向けの格好で、お千代は死んでゐた。夜着を亂し、小さな兩手は前をはだけて固まつてゐた。仰け反つた姿勢のせゐで、口角から流れ出た血が耳に向かつて垂れてゐた。曲馬が、其れを笑顔と準えた。

――何故、此處で【笑顔】が出てくるのかが分からない。薄い胸には、己の爪が附けた引つ掻き傷。赤い赤い溝。

「ぢやあ、胸を病んでたつてことは？」
「ないよ」
「ないよ」
「ないよ」
「氣に入らないのは、お巻が氣づくのが遲(おそ)いんだ。目が見えないのなら。餘計(よけい)に耳は良いだらう」
首を捻る滋比古。
三ツ首は、そんな彼を煽(あお)るやうに喋り續(つづ)ける。
「早く解かないと、間に合はないよー」
「明日まで明日までー」

「違ふよ違ふ、ずっと一緒だよー」
そしてまた、ゲラゲラゲラゲラ。
「どつちだよ。いや待て。お前達、何時(いつ)から興行するんだ？」
滋比古は、三ツ首に向き直る。
「お千代が死んだからつて、警察にも届(とど)けないみたいだし。興行は、やるんだらう？」
「しないよしないよー」
「此處には家族を増やしに來たのー」
「違ふよ違ふ、減つちやつたー」

「家族つて團員のことだろ。今、何人居るんだ」
「團長と馬夫人とロッポンとキャット次郎とキャット三郎とー」
「ツラヌキお巻とスマヰルお千代！」
「違ふよ違ふ、お千代は居ないよ。ヒィ！　フゥ！　ミィ！　三ツ首道化を忘れちやダメー！」
「……其れだけか？」
「そんだけー！」
初めて三ツ首の聲が揃つた。ゲラゲラゲラゲラゲラ。けたたましい歡聲（かんせい）。

滋比古は堪(こら)へて續ける。

「ジンタとかはどうするんだ」

「大きな街では、其處で雇ふよ」

「小さな村では、みんなでやるよ」

「鍋釜叩いて、手拍子足拍子、口三味線(くちじゃみせん)！」

三つの唇がジンタッタージンタッターと歌ひだす。二つの掌、茶袱臺叩いて、ジンタッタ。

「もう好いッ！　實演(じつえん)するな。……落ち着いて考へられないや」

滋比古が歎(なげ)く。

「水でも飲(の)んで落ち着いてー」
「湯冷ましだから安心ー」
「子供の癖に酒臭ひー」
傍(かたわ)らの藥罐(やかん)を差(さ)し出されたが、一瞥(いちべつ)で拒否。問ひを續ける。
「興行しないなら、ぢやあ、何で此の街に來たんだ?」
「呼ばれたから來たよ」
ヒィが眞顔(まがお)になつた。
「馬夫人は産み月で」
フゥが眞顔になつた。

「可愛い仔馬が生まれるし」
ミィの瞳の奥は笑つたままだつた。
「ぢやあ、何で」
滋比古の言葉を、三ツ首は遮(さえぎ)る。
「家族を増やすんだよ」
「なのに減つちやつた」
「違ふよ違ふ、また増えるんだつて」
「呼ばれたから來ただけ」
「君は死ぬ程、お腹空いた事なんてないでしよ」
「御菓子に猫イラズが入つてても食べちやふくらゐ」

「違ふよ違ふ、知らなくて食べたんだよ」
「家族だけどね」
「家族だからね」
「家族だよ」
「お水は如何」
「お水は如何」
「お水は如何」
三つの首がニヤニヤ笑ふ。生白い右手と左手が、ちぐはぐに動き、眼前に迫る。
ゲラゲラゲラゲラ。

「い、要らないッ」

滋比古は背中から、部屋を轉(ころ)げ出た。爆發(ばくはつ)する嬌聲。

パッと電燈が消える。續く廊下は、細く長く、暗い。

第伍（ご）幕

キャット兄弟、猫ダマシ

キャット次郎とキャット三郎

画／サデスパア堀野

ピシャリと襖が閉められた。風壓。滋比古は尻で後退る。背中を壁に附け、遠ざかる氣配を耳で追ふ。

やがて訪れたのは、屈辱。まんまと三ツ首に、からかはれたのだ。闇の中、常より赤い其の頬をカァと燃やす。

と、ガタリ異音。悲鳴を喉で押し殺す。玄關の引き戸だと氣附く。尻を牀に着けたまま、滋比古は其方に直つた。カンテラの燈りが搖れてゐた。

「おやおや、坊ちや……滋比古様ではありませんか。如何されましたかな」

曲馬だつた。滋比古は立ち上がる。

「何でもない」
ぶつきら棒に答へたが、聲音に潛(ひそ)む安堵は隱せない。
「質問に回りたいんだが場所が分からない。案内しろ」
「廊下は電燈がないですからね。其れはもう無理はないでせうよ。うっふっふ」
含みを持たせた言ひ回しが氣に入らないが、此處は滋比古が讓(ゆず)つた。
「キャット兄弟を探してゐたんだ」
「畏(かしこ)まりました」
三ツ首の部屋からは、一切の氣配が消えてゐる。此の

問答は聞こえてゐるだらうに。團長の出迎へをしないのか？

然し、滋比古は何も言はない。曲馬も無言を通した。

二人の歩（ほ）に連れて、廊下がギィと鳴く。

「此方（こちら）です」

曲馬が立ち止まり、襖を開いた。中も闇。

「唯今（ただいま）ぁ。良い子は、何處（いづこ）に？」

キャアともニャアともつかない聲が上がり、幼い兄弟が布團（ふとん）から飛び出した。

「濟（す）まないね。良い子はもう寢る時間ですのに。御客様

をお連れしたんですよ」

代はる代はる二つの小さな頭を撫で乍ら、曲馬は滋比古を紹介した。

「寝てるのに、惡かつたな」

兄弟は恐らく十(とお)にも満(み)たない。滋比古の態度も柔らかくなる。布團の脇に、カンテラが置かれた。

兄弟は曲馬の左右に分かれて坐り、其の膝に凭(もた)れるやうにして甘へてみせる。二人とも兩手で握り拳を作り、絶えず口元に添へてゐる。

「扨(さ)て。滋比古様。キャット兄弟は幼うございます故、

お話は私が代はつて致しませう」
「何だと？　其れぢやあ話が」
「おやおや、滋比古様は猫語を御理解戴けましたかな？」
「……ね、猫語お」
「キャット兄弟は猫語しか口に出來ません故、通譯が必要かと。嘘誤魔化しなど一切致しませんので、どうぞ御安心なさいませ」
不安げに、庇護者に寄り添ふ兄弟。曲馬は二人の背に其れ其れ腕を回すと、抱へ込むやうに力を込めた。
ボクから守つてゐる――と、云ふのか。

滋比古の胸にチクリ。豫期せぬ回想。

病の牀にあり乍らも自分を抱き寄せて呉れた母。當然のやうに父を抱き締める義母。自分ではない子を抱き上げ、眦を下げる父。其の父が自分へと向けた眼差し――消えろ！　滋比古は頭を激しく振つた。前髪が亂れる。

「そんな小さい子達を、一體どうしたんだ」

其の様を、面白さうに眺めてゐた曲馬は、笑ひを含んだ聲で応じる。

「坊つ……、滋比古様は誤解をされてますな。私が此の子らを人買ひから買つた、いや、何處からか攫つてきた

とかねえ？」

捲(まく)し立てる。

「まさかまさか。だつたら何故に、此の子らはこんなにも私に懐くでせうか。うつふつふ、此れもまさか芝居だと仰(おつしや)る？」

分厚いカイゼル髭を撫でつけ乍ら、挑發(ちようはつ)の口調。兄弟は握り拳を口元に置いたまま、其(そ)れ其(ぞ)れ滋比古と曲馬とを見比べて、ぺたぺたにゃあにゃあ喋つてゐる。意味など、さつぱり分からない。

「私が何故、ゼニトル曲馬と呼ばれてるとお思ひ？」

唐突な問ひ。

「馬夫人の話をしませう」

唐突な話題。

「馬夫人は此の曲馬團に來てから、まだ六月。勿論ロッポンも一緒です」

「な、何でそんな話を」

「卑しくも此處ジェントル曲馬團を名乘る舞臺で、馬術を披露する腕前に成るには一夜漬けなどでは足りません。ましてや姙婦。訓練など出來ません」

薄明りの下、お互ひは表情を探り合ふ。

「滋比古様には、此の意味がお分かりですか」
「……う、いや、分からない」
滋比古は、注意深く返事を選ぶ。
「馬夫人は、此處に來る前から馬術の素養があつたと云ふことです」
ゆつくりと續ける曲馬。
「例へば。何處の馬の骨とも知れぬ男の、子を宿した、元より馬術を嗜(たしな)む階級の令嬢が、御家(おいえ)の恥だと表舞臺から消された先が、此處だつた」
滋比古は、彈(はじ)かれたやうに顔を上げた。

「祕密を喋らぬ代償としての、莫大な持参金と一緒に」

曲馬の片頬が大きく歪み、

「二度と表の世界に戻して呉れるなと云ふ、代金として。ジェントル曲馬團は、そんな不幸な者達が寄り添ふ場所なのだとしたら、どうです」

吐き捨てる。

「此の子らも三ツ首も、死んだお千代も皆同じ。滋比古様、貴方の居た場所からすれば、此處は御家の邪魔者達の吹き溜まり」

滋比古は、曲馬の言葉を心で反芻する。――曲馬はあ

あ言つたが、自分だつて御家の邪魔者――。
異様な雰圍氣にキャット兄弟は怯えてしまひ、何時の間にやら黙つてしまつた。
「おっと、御免よ、良い子達」
曲馬は兄弟其れ其れに微笑み掛け、其の背を優しく撫でてやる。やがて安心を取り戻したか、ぺたぺたにゃあにゃあが、また始まつた。
曲馬は、打つて變(か)はつて穏(おだ)やかに語りだす。
「私は約束事を決めました。此處に來て【笑ふ】ことが出來たとき、其れが私らが眞(しん)の【家族】になつたときだと」

「ぢやあ、お千代が笑つたなんて言つたのは、最期の餞（さいごはなむけ）」
「いえ、滋比古様。お千代は【笑つた】のです。笑ひ度（た）いと願つてゐた、あの子の悲願が血化粧と成り、笑みの形を作つたのです。――まあ、死んだ後でしたがね」
「死んだ後……、まさか自害なんか」
「其れは、残念（ざんねん）なことに違ふとは言ひ切れません。お巻が、戸棚の御菓子には猫イラズが仕掛けてあることを、お千代に告げてゐたかを忘れてゐるのですから」
「ぢやあ告げてゐれば、自害。いなければ」
「夜中にお腹が空いて食べたのか、御下げを切られた意

趣返しに、子供らしい復讐をした積もりだつたのか——、最早慥かめる術などありません」

其れを聞いた滋比古は、腰を浮かせて叫んだ。

「ぢやあ、なんでボクを此處に呼んだんだ！」

其の劍幕を、キャット兄弟の猫目が四つ、見つめてゐる。

「ボクが解く謎なんて、何にもないぢやないか！」

愚弄されてゐた！　三ツ首から喰らつた屈辱の、何倍もの苦味と痛み。

「御無禮、どうぞお許しください。滋比古様に、どうしても此方に來て戴きたかつたものですから」

曲馬は穏やかな態度を崩さない。其れが餘計に滋比古の血を滾(たぎ)らせる。

カンテラの燈りの中、唇を震はせる滋比古に、

「本當にお願ひしたいことは、此れからお話し致します」

曲馬が一禮(いちれい)した。其れに倣(なら)い、一拍遲(おく)れてキャット兄弟も頭を下げた。――恐らく意味など分からずに。

「お巻の處(ところ)へ、行つてやつてはくださいませんか」

掻き口説くやうな曲馬。カンテラの燈りのせゐか、滋比古の瞳が搖(ゆ)れてゐる。

「滋比古様の優れた腦髄と慈悲深い御心(おこころ)で、お千代を殺

したかもしれないと煩悶(はんもん)するお巻を、救つてやつてはくださいませんか」

滋比古は暫(しばら)く項垂(うなだ)れて、

「……ボクに何が出來ると」

と呟いた。

「滋比古様、其れは違ひます。どうぞお巻の處へ行つてやつてくださいませ。お巻は目が見えません。暗い中、唯一人、罪悪(ざいあく)感と後悔に苛(さいな)まれてゐることでせう」

曲馬はカンテラを差し出した。

「さあ、滋比古様の御言葉で、お巻を救つてやつてくだ

さいませ。私が言ふのも何ですが……、もう、お分かりになつてらつしやるのでせう？　聰明（そうめい）な滋比古様」

滋比古は其の言葉を心で繰り返し、噛み締め、意を決すると立ち上がる。カンテラを受け取り、頷いた。

「お巻の部屋は突き當（あた）りです」

「有難う」

滋比古は肩越しに、本心から禮（れい）を言ふ。カンテラが遠ざかり、曲馬とキャット次郎と三郎が闇に溶けていく。

ぺたぺたにゃあにゃあ。

滋比古の胸に天啓のやうに、太郎が居ない譯（わけ）が閃（ひらめ）いた。

決して口にはしまひと誓ひ、襖を開けた。

宝塚少女歌劇團

嘘つき曲馬団

第陸（ろく）幕

ツラヌキお巻は

何故う

つらぬきお巻

画／サデスパア堀野

お巻が待つ其の部屋へ。細長い廊下の果て。
ほとほとと襖を叩き
「お巻……さん、入つても好いですか」
滋比古は呼び掛けた。ざらりと物音。
「入つとくれ」
ざわりとした聲音。一呼吸置いて、滋比古は進む。
「此處に來ることは、團長から聞いてゐたよ。坐るが好いさ、坊ちやま」
「……はい」
滋比古はカンテラを茶袱臺に置き、跪(ひざまず)く。疊(たたみ)が濕(しめ)つて

ゐる。

「こんな遲くに、其の……」

正直な氣持ち、戸惑つてゐた。ナイフ投げのスタアだと聞いてゐたので、妙齢の颯爽(さつそう)とした婦人だと許(ばか)り思ひ込んでゐたのだ。然しどうだらう。其處に居るのは、小さな丸い背の老婦人。

其の兩目(りようめ)の周りに、黒い目隠し布がグルリと巻かれてゐる。

「あの、大丈夫ですか」

滋比古の言葉に、お巻は顔を上げる。

「柄にもなく參(まい)つちまつてねェ」
「……全部、團長に聞きました」
「さうかい」
沈黙。どう切り出して良いものかと滋比古。其れでも言葉を探して、唇を開かうとしたとき、お巻に先を越される。
「お千代は、あたしが殺したやうなもんだねェ」
首が折れるほどに項垂れた。
「いえ、違ひます！」
滋比古は否定する。猛然と否定する。

「お千代……さんは、事故でした！　お巻さんと家族にならふとしたことが切つ掛けの、哀しい事故です！」

茶袱臺に手を突き、身を乗り出し、お巻に叫ぶ。

「甘へたんです。お千代さんは、お巻さんに甘へようとしたんです」

「甘へた？」

お巻の口が、ぽかんと開く。

「さうです。お千代さんは口から血を吐いて死んでゐた。此れはきつとお巻さんが寢てから、猫イラズ入りの御菓子を食べてしまつた結果の、事故なんです！」

「事故……」

「お巻さんが戸棚に仕掛けておいた御菓子を、お千代さんは食べたんです。髪を切られて、拗ねて、かうなつたら代はりにお巻さんの御菓子を食べてやれッて、其れで」

「あああッ、慥かに毒饅頭を入れてゐた。だけどあたしは、あの子に其れを注意したのか忘れちまつてゐるんだよ、ああ、お千代、お千代、可哀想に」

お巻の狂亂。目隠しの上から兩目を掻き毟る。

「お巻さん、落ち着いて！　よく聞いてください。お千代さんは、お巻さんの御菓子を惡戯したんです。お巻さ

んに甘へた證據(しょうこ)です」

お巻の動きが止まる。

「家族にならふとした氣持ちが、芽生えてゐたんだと思ひます」

滋比古は今にも泣き出しさうに、聲を震はせてゐる。

お巻の聲も、震へてきた。

「坊ちやま、あたしはねェ、みんながお千代が笑つてゐる笑つてゐるつて言ふのはね、見えないあたしへの、へタな慰めだと憎々しく思つてゐたんだよ」

「お千代さんは本當に笑つてゐたんだと、ボクは信じます」

堪へきれず語尾が掠(かす)れた。不謹慎(ふきんしん)なことだと自覺(じかく)はあつたが、お巻に泣き顔を見られないことが、滋比古には迚(とて)も有難かつた。

「坊ちやま、お優しい坊ちやま。其の言葉にあたしは救はれたよ。お千代は、さう、笑つてゐたんだねェ」

お巻の聲が更に震へた。

滋比古の口から、抑へてゐた嗚咽(おえつ)が漏れた。

「坊ちやま、あたしはもう大丈夫さ。早く團長に此のことを知らせて呉れないか」

震へを通り越し、絞り出すやうなお巻の聲に滋比古が

頷く。

「はい。知らせます。お巻さん、どうか……」

「ああ、分かつてゐるよ。大丈夫さ」

滋比古はカンテラを取り、名残惜しげに部屋を出た。

だから知らない。一人になつたお巻が、つひに肩を揺らして[illegible]い出したことも。ヒッヒッヒッと息を吸ひ込み、[illegible]い出したことも。

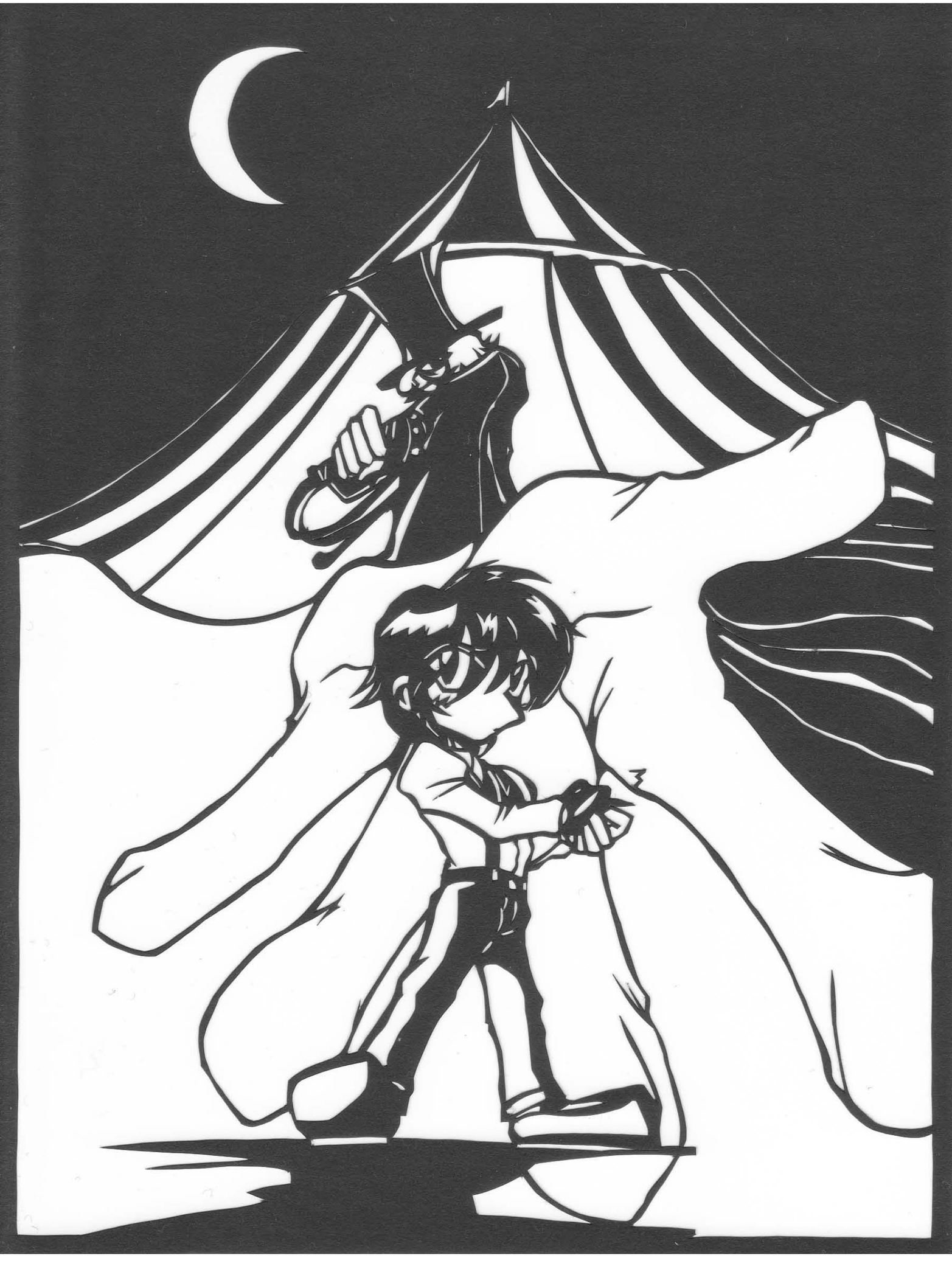
「何だい、ありゃ。聞きしに勝る、莫迦だねェ」

と云ふ獨り言も。

第捌幕（はち）

嘘つき曲馬團

ジェントル曲馬と滋比古



切り絵／ぴぺっと！（原画／サデスパア堀野）

滋比古は、立てつけの悪い玄關の引き戸を叮嚀（ていねい）に閉めて、外に出た。上弦の月。

「滋比古様」

密やかな聲は曲馬。手招きをしてゐる。井戸の蓋に置いてあるカンテラが、其の姿を幻燈のやうに浮かび上がらせてゐた。其の横に、滋比古もカンテラを置く。明るさが倍に成る。

「坊つ……いえ滋比古様、お巻はどうでした」

「お巻さんは、大丈夫だ」

滋比古は胸を張る。

「お千代さんは、本當に笑つてゐたんだと傳(つた)へたよ。お巻さんに甘へて、最期に家族になつたんだとボクは信じる。だから」

「何と慈悲深い」

曲馬は滋比古の言葉を遮り、兩手を廣(ひろ)げた。花のやうな白手袋。

「矢張り貴方は、本物の紳士であらせられる。カフエエや先程までの態度は、目眩(めくらま)し。正しいお血筋の御方ならではの、御判斷(ごはんだん)」

言ひ乍ら、曲馬は上着の内ポケットを探り、小さなア

ルミニュウムの水筒を取り出した。
「カフエエから珈琲を貰つてきたのですが、如何」
「え」
「まう、すつかり冷めてをりますし、ああ、牛乳もお砂糖も入つてをりませんし、滋比古様のお口には合はないかもしれません」
何だか、少し、突然過ぎるやうに滋比古には思へた。
だが、澤山(たくさん)喋つて喉が渇いてゐた。
「ボクは、牛乳も砂糖も要らないぞ」
「では、お口に合ひますな」

曲馬が差し出す水筒を、滋比古は受け取つた。考へがないままに受け取つた。重ねたコクテルが效(き)いてゐたせいもあり、染み入つた。苦い。だけど、曲馬の言ひ草が癪(しやく)に觸(さわ)つてゐるので、飲み干した。

「全部飲んだからな」

「其れは其れは。お流石(さすが)でございます」

――一體何時くらゐなんだらう。滋比古は月を見上げた。言ふべきことがあつた氣がするが、夜も更けてきたせゐか冷えが氣になつてきた。頬や指先ががジンと痺れる。

「滋比古様、ところで一つ氣が附かれてますかな」

分厚いカイゼル髭を撫でつけ乍ら、曲馬が訊いた。
「何だ」
足先まで冷えが來たのか。滋比古の爪先がジンジンと痺れる。
「キャット兄弟のおおお部ェ屋でェ話ししししたあァあ」
曲馬の聲が搖れ出した。耳まで冷え切つたかと、滋比古は兩手で耳朶を摘む。
暖かい。
熱い。
曲馬の口が動いてゐる。分厚いカイゼル髭を、頻(しき)りに

撫でつけてゐる。一連の動きがゆつくりとぶれてゆく。
目の前がグラグラと搖れる。
——ボクは……、寒いんぢやない！
「もおおォおううぅウォそイよおおォォ」
曲馬の聲が、遠くから近くから何重にも響く。
「サアああミるがいィィいイ」
月明かりに白く輝く兩手がゆつくりと、分厚いカイゼル髭を剥ぎ取つた。
滋比古は、懸命（けんめい）に井戸の蓋に手を附き乍ら、聲と同じく何重にも重なる曲馬の姿を、顔を、露（あら）わになつた唇を

凝視する。一瞬だけ焦點(しょうてん)が合つた。

「か、母さ」

舌が縺(もつ)れ、グラリ。倒れ込む滋比古。意志を失つた腕がカンテラを薙(な)ぎ拂ひ、燈りが消える。曲馬が兩腕(りょううで)を開く。花のやうな白手袋。少年の赤い頬は、待ち構へてゐた二塊(にかい)の柔(やわ)い肉に埋もれた。

「失敬な。ずうっと若いよ。うっふっふ……あっはっはァ！」

暗轉(あんてん)。

暗闇に、ポッと緋色。左右に分かれ、丸く走り、忽ち炎の輪と成る。

トトトト、タン！　輕快な足音とともにキャット次郎がトンボを切つて、躍り出た。トトトト、タン！　三郎が後に續く。ピタリ。見得を切る其の顔には猫の口。

ジンタッター。ジンタッター。ジンタッタッタァター。口三味線。三ツ首のヒィ、フゥ、ミィが滑稽な動きで舞臺に躍り出た。三つの首が律動に合はせて、ぐるぐると廻る。

ぐるぐると廻る首の隙間を縫つて、銀の刄(やいば)が擦り抜ける。ツラヌキお巻のナイフ投げ。三ツ首の髪の毛一筋、傷附けず、背後の板に小氣味よく刺さる。黒い目隠し布には一分(いちぶ)の隙もない。

くるり。ジンタッタの聲に合はせ、優雅にターンを繰り返しつつ登場するは、馬夫人とロッポン。スラリと美しい青毛馬ロッポンは、キリンのやうなシルエット。四本の脚で、見事な足捌(あしさば)き。殘る二本の前足で、馬夫人の手を取つて踊る。

うつとりと夫を見上げる夫人の横顔。そして、つぅと

流し目。滋比古は顔を背ける。

背けた先に、髭のない曲馬が立つてゐて、ゆるりと両腕を廣げた。花のやうな白手袋。「母様」と同じ[illegible]で、[illegible]いる。其の[illegible]が何かを言ひ出す前に、目を閉ぢた。

分かつてゐた。

此れは夢だ。自分は今、本當は眠つてゐるんだ。身體に傳はる、一定の搖れ。――ボクは眠つたまま、何處かへと運ばれてゐるんだ。

滋比古の意識は、其處でまた途切れた。

溶暗（ようあん）。

画／ひょーじ

終幕

大團圓（だいだんえん）

プリンス飛駒とジェントル曲馬團

画／有川憂

港に定期船が着いた。

今日は特別。珍しい御客様達の登場だ。待ち侘(わ)びてゐた子供らが、鴎(かもめ)と一緒に群れを爲(な)す。

艶(あで)やかな三ツ兒の姉妹が、高らかに叫ぶ。

「ジェントル曲馬團が、やつてきたわよお！」

キャーッと鋭い嬌聲と共に、船から驅け降りた。手に手に持つた籠から、紙吹雪が青空へと舞ひ上がる。子供らが皆、爭(あらそ)つて拾ひ集める。其の小さな掌(たなごころ)から、再び放たれる紙吹雪。

痩せた二人の少年が轉がるやうな側轉(そくてん)で、三ツ兒の歩

みを追ひ抜(ぬ)いて、港の廣場(ひろば)の眞ん中で、ピタリと止まる。

よく似た二對(につい)の吊り目。口元を赤い布で覆つてあるせいか、恐ろしく目立つ。其の後に續く少年と少女の、細(ささ)やかな列。揃つて愛らしい装ひで、其れ其れ犬を連れてゐる。

御客様は、まだ續く。細い渡し板を、髪を後頭部高く一つに結んだ大女にあやされて、太つた青毛の馬がよろよろと降りてゆく。

「氣を附けな」

船乗りが聲を掛ける。

「あいよ」

大女が片目を瞑(つむ)つてみせた。

と、スラリと姿の良い若い馬が、隣に竝んだ。此方も青毛。

續いて降り立つは、青年。まだ少年の面影の残る滑らかな頬だが、何處か人を食つたやうな顔をしてゐる。髪の毛で隠してゐるが、其の耳には左右ともに、汽車の切符のやうな切れ込み。

彼の名はプリンス飛駒(ひこま)。此の『ジェントル曲馬團』のナイフ投げのスタアなのだ。

其の後ろで、分厚いカイゼル髭を撫でつけてゐるのは、團長のジェントル曲馬。金の巻き毛が陽光に煌(きら)めいてゐる。

「御父様がお亡くなりになつて、早三月(みつき)。蔓部海運はあの女のモノに成りました」

見せ掛けの髭の下で、赤い唇が蠢(うごめ)く。

「名目上は貴方の義弟君(おとうとぎみ)が筆頭ですが、あの幼さで何が出來ませう。其の母が、愚かにも暗躍し、最早(もはや)御父様が築き上げた全てが離散する方向へと――」

「――父様」

青年の眉根がギュッと寄る。

「ボクは父様を誤解してゐた。ずっと、ボクのことが邪魔だとばかり」

「しげ……、いえ飛駒。甍部様が、祕密裏に私に依頼を下さつた御蔭で、かうして無事にあの女から貴方を御守りすることが出來ました。あのままだと、遲かれ早かれ貴方は亡き者とされてゐたことでせう」

「其の恩は片時も忘れたことはない」

「何を！　恩だなんて。私達は家族ではありませんか」

曲馬が、誰にも見えないやうに、青年の手を取つた。

「貴方を正統な御立場へとお返しするのが、私の……い

え、御父様の願ひです」
「ぢやあ、ボクは」
「闘ひに成ります。あの女と義弟君との。貴方はあの家に、
甍部海運へと歸らねばなりません」
青年は答へず、曲馬の手をそつと外して歩き出した。
「まだ、駄々捏ねてんのかい」
曲馬の陰から、ぬつと老女が顔を出した。幅の廣い黒
い布で、目隠しをしてゐる。
「時間の問題さ」
曲馬は、ひらひらと手を振る。花のやうな白手袋。

「其れにしても、親父はさつさと死んだもんだね」
「早くて良かつたよ。親父が生きてる間は、此の嘘がバレる危険(きけん)があつたつてもんだ。大體(だいたい)私ら、うっふっふ、顔を合はせたこともないんだしねえ」
「あの女、絶對(ぜったい)何か手を下したね。毒かね、やつぱり。はあ、怖い怖い。其處が突ければねェ」
「だから何度も言ふけど、證據(こんきょ)がないさ。無駄なことはもう言ひなさんな」
何度も繰り返してきた愚痴を吐く老女を、曲馬が制す。
「何とか成るさ。坊ちやまを手に入れたときみたいに。

あのときは丁度良い工合に、子供が死んでくれたしねえ。何て名前だつたかな」

「そんなこともあつたねェ。御陰で、苦もなく坊ちやまが」

「簡單過ぎて缺伸も出ないつてね。今度も、上手くいくさ」

「ヒッヒッヒッ。こつちには長男が居るんだ」

「さうさ。坊ちやまが居るんだ。うっふっふ」

二人の見る先には、廣場の眞ん中で器用に五本のナイフで御手玉をしてゐる、プリンス飛駒。

子供らの歡聲。絶え間ない紙吹雪。はしゃぐ犬ら。仲良し【家族】達。

曲馬の視線に振り返つた青年は、につこりと笑顔を返した。

——閉幕

ジェントル曲馬

画／サデスパア堀野

回り舞臺、
若(も)しくは樂屋(がくや)裏
踊らずの踊り子、
團長の鞭にて踊る

黄色い電燈がポツリと點いた。

女が二人。

一人は和裝。高價な御召しに金絲刺繍の帯を締めてゐる。髪は流行の耳隠し。奥様と云ふよりは、女優のやうな出で立ちだ。

もう一人は洋裝。男のやうに黒いズボンを履いてゐる。髪は金に染めた巻き毛と云ふ、一種異様な風貌だ。

然し其の容姿には、對照的な服裝や髪型では誤魔化し切れない相似がある。

特に唇。奇妙なことに、こつてりと化粧を施してゐる

和装の女も、化粧氣のない洋装の女も、どちらも同じ程に赤く、薄い。美しく整つた形なのだが、女性らしい温かみや優しさなど、全くない。

「で、ちやあんと始末して呉れたんだらうね」

沈黙を破つたのは、和装の女だ。外觀（がいかん）に合はぬ低い聲。

「ちやあんとやつたから、呼んだんぢやないのさ」

洋装の女が顎をしゃくる。其處には、汚れたクロースに覆はれた長テエブルがあつた。

クロースの下には何があるのか、ムクムクとした大きな盛り上がりが、いや其れは人の形をしてゐるやうで、

和装の女がグウッと身を乗り出した。

「そら。中を見なよ」

洋装の女が、さも面白さうに、もう一度顎をしゃくる。

「五月蠅(うるさ)ゐね」

和装の女は早口で応じると共に、亂暴(らんぼう)にクロースを剥ぎ取つた。

「うつ」

途端、むうつと立ち昇る異臭。目に沁(し)みるやうな炭と肉とが焦げた臭ひ。濕り氣のある瘡蓋(かさぶた)を剥がしたときに嗅ぐやうな、生臭さも混じつてゐる。

其處にあつたのは、生燒(なまや)けの子供の骸だつた。
和裝の女は、化粧で汚れる事など失念し、素早く袂(たもと)で鼻と口を覆つた。
「どうしたよ。ちやあんと始末してるかどうか、きちんと確認してお呉れ」
洋裝の女が勝ち誇つたやうに、聲を張る。
「分かつてるよ、畜生」
和裝の女は嘔吐(えず)き乍らも、横たわる屍(しかばね)を檢分(けんぶん)する。
「何だい、此れは、燒いたのかい」
「ああ。絞めたり刺したり毆(なぐ)つたりは、手が汚れるし、

ヤぢやないか。燻(いぶ)し殺す筈(はず)が、うつかり燃えちまつてね。ま、其處は勘辨(かんべん)しとくれよ」

「えげつないことするねェ、燻すだなんてさ。髪も顔も焼けちまつてて、確認も何も……、ああ、隨分(ずいぶん)苦しんだみたいだねェ、へえ、あのおちよぼ口がこんな形に成るなんて」

和装の女は、腰こそ引いてゐるものの、恐ろしい様の屍を觀察(かんさつ)する。

「掌が一番判り易いんだけど、ああ、やつぱり焼けてるか。畜生。此れぢやあ、確認の仕様がないぢやないか」

「おつと、身代はりの子供を殺すなんてしてないよ。そんな危ない橋なんて渡るかい。大體、此の街で子供が攫はれた話なんて聞かないだらう。此れは間違ひなく、あんたの處の莫迦坊ちやまさ」

「ああ、さうだねェ。お前が彼奴(きやつ)を生かしておく理由もないしね」

「子供は嫌ひさ」

「金に成らない子供は、だらう?」

「うつふつふ」

和装の女は、バッと哀れな屍にクロースを被せた。用

が濟んだら、一瞬足りとも視界に入れたくはない代物(しろもの)だ。
「納得したかい？　したんなら」
と、洋裝の女が左手を差し出し、親指と人差指とで輪を作る。
「分かつてるよ。卑しい奴だね」
「姉さんには、煮え湯を飲まされつ放しの人生だからねえ、うっふっふ」
「濟んだことはもうイイぢやないか。……ほら、受け取んな。約束通り、もう此の街には寄り附くんぢやないよ。其の死骸も始末しな」

「任せてお呉れ。最近は、子供の骨が高く賣(う)れるんだよ。死骸を貰へるのは、好都合さ」

「骨が！　賣れるのかい！」

「其れが、買取り先が小學校(がっこう)なのさ。理科の學問(がくもん)に使ふさうだよ」

「へェ、こりゃたまげた。死んでから學校に行くなんて、マヌケも好いとこだよ。然も小學校なんてさ」

「うっふっふ。實際(じっさい)、丁度好いんぢやないかねえ」

やがて、黄色い電燈はフッと消える。衣擦(きぬず)れ、蝶番(ちょうつがい)の軋(きし)む音、ガチャリ錠前が落とされ、靜寂(せいじゃく)。

——ぐるり、終幕へと廻転（かいてん）

嘘つき曲馬団

宝塚少女歌劇團

嘘つき曲馬團

画／よしはるK

もっと読みたいですか？

竹の子書房文庫は、読者の皆様のご意見・ご感想を糧に、日々ニョキニョキと成長します。もっと読みたい、続きを読みたい、もうやらんでいい、などなど、ご意見ご感想などありましたら、

http://www.tknk.info/?p=1615

こちらのページまでご感想をお寄せ下さい。

また、ハッシュタグ

#竹の子書房【嘘つき曲馬團】

に、ご感想を一言添えてReTweetしてくださいませ。

RTがたくさん付くようでしたら、大慌てで続きを書きます。

東日本大震災への義援金のお願い。

2011年3月11日に東日本を襲った震災の被災者を救援するための義援金、救援金をお願いしています。

◆日本赤十字による義援金受付

http://www.jrc.or.jp/contribution/l3/Vcms3_00002069.html

■郵便振替（郵便局）

口座記号番号　00140-8-507

■三井住友銀行

銀座支店　（普）8047670

■三菱東京UFJ銀行

東京公務部　（普）0028706

口座名義　日本赤十字社

竹の子書房文庫創刊に寄せて

竹野正法　竹野美恵

竹の子書房の前身である筍書房は、昭和二十年、終戦直後の東京に創立した。空襲により焼け野原となった国土を前に、我々は何故負けたのかを自問自答した創業者・竹野正法は、そこに彼我の文化の差を痛感したという。当時の日本は学童の就学にも事欠く有様であったが、良い図書を広く頒布せしめることで日本の教育水準を一層高めると同時に、知を愉しむ、娯楽としての読書の価値を広めるべく、古今東西のあらゆる娯楽を書籍化することを決心した。当初、一刻も早い国土の再興を願った竹野正法は、自らの姓から一字取り「竹書房」と名付けることを考えた。しかし、創立当時、空襲で焼け残った土に半ば埋もれたあばらや住まいであった竹野は己の分を弁え、敢えて「未だ土の中」として筍書房と名付けた。竹野正法は、焦土の中から拾い集めてきた焼け板に、燃え落ちた家屋の墨を溶いて「筍書房」と墨書した。焦土の苦しみを忘れまいぞと誓うこの看板は、平成頃まで長く筍書房の誇りと誓いを現すものとして本社正面玄関に掲げられてきた。その後、竹野正法の願いは須く実現された。昭和二十七年、サンフランシスコ平和条約の発効により自由を取り戻し、続く朝鮮戦争特需で奇跡の復興を成し遂げた日本にあって、筍書房は広く教育と娯楽を提供するべく粉骨砕身し、ウィットとペーソスを身につけた教養人の育成に努めた。

平成の初め、日本は空前のバブル景気に沸いた。筍書房は経営の拡大を目指して不動産経営など多角経営に乗り出していたが、バブル崩壊と同時に経営が悪化。会社更生法適用が視野に入る、会社存続の危機に見舞われていた。創業者・竹野正法は、失意の中、会社存続を願って世を去った。この筍書房の空前の危機を救ったのが、後に社長職を継ぐ竹野美恵である。既に萌芽はあったものの、男社会であった出版界ではその内容に眉を顰める者も多く日陰に甘んじてきた「やおい」に着目した竹野美恵は、女性読者の獲得を狙ってこの分野を表舞台に引き上げた。竹野美恵の狙いは的中し、日陰で腐り果てていた日本全国の腐女子、貴腐人の心を掴むことに成功した。筍書房社内ではこれを「美恵流」と称して讃え、後の「BL」の語源ともなった、とされている。筍書房は美恵流の成功により息を吹き返し、娯楽出版社として甦った。竹野美恵はさらに改革を推し進めた。旧来の筍書房という社名では如何にも厳ついイメージが強く、美恵流に馴染んだ若い読者に近寄りがたいイメージを与えてしまう。そこで、C/I戦略に則り、社章と社名の刷新が進められた。社のシンボルマークである竹の子印はこのときに社章として選ばれた。竹の子印はその後、数代に亘って修正が加えられ、平成二十二年に現在の形となった。社名については「筍」の文字を読めないゆとり世代の若年層にも読める文字をという配慮から、音を同じくしつつ「竹の子」とした。昭和二十年の創立から六十五年をして、ここに現在の「竹の子書房」の名称が定着した。

竹の子書房はその後躍進を続け、電子書籍事業に進出、特化を果たした。しかし、創立時の竹野翁の気高い志を忘れることなく、竹野美恵の柔軟さを蔑ろにすることなく、なお一層の進展と社会への貢献を続けていくべく、ここに誓いを新たにしたい。

嘘つき曲馬団

画／よしはるK

竹の子書房

嘘つき曲馬團

弐千壱拾弐年壱月拾肆日　初版發行
弐千壱拾弐年壱月拾九日　改訂第肆版發行

著者　黒実操
表紙　サデスパア堀野
編集協力　竹乃子書房校正課・野戦校正師團
監修　加藤　壱

発行人　加藤　壱
発行所　竹乃子書房　http://www.takenokoshobo.com/
製版所　GLG補完機構

© Misao Kuromi/Takenoko-Shobo 2012 Assembled in Minami-Nagasaki

ヒィ、フゥ、ミィ

画／サデスパア堀野